一統

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
全三十七年十二月十五日發行統一第百十七號　毎月一回十五日）

第百十七號要目

○日蓮聖人の教義一班……本多日生
▲雜司ヶ谷後記……しらゝと
○日蓮聖人の宗義及系統……本多日生
▲先更會……
○日什聖人置文諷誦抄卷上……阪本日桓
▲枳木師の置山……
○余が答辯書を讀むと云へる究竟生に告く……清瀬真雄
▲各地教信……
○慶長宗論批判……文學士　辻善之助

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回
全卅七年十一月十五日發行統一第百十六號　十五日）

御雛
附そく
小道具
人形

武者
東羽子
人形板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

廣告

會計上整理の都合有之候に付誌代滯納の方は至急御成拂込相度希上候也

東京淺草區南松山町
統一團

明治三十七年九月

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割增但五厘切手を眞とす
一諸讀申込の節は住所姓名を瞭書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅七年十一月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暐學
印刷所　北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所　統一團

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地
統一團

釋迦牟尼佛、舍利弗に告げ給はく、我は是衆聖の中の尊、世間の父なり、一切衆生は是吾子なり、あはれなる子等は世樂に貪著して慧心あることなし、三界は安き一ことなく猶火宅の如し、衆苦充滿して甚だ畏るべし、見よ常に生死病死の憂患あらすや、斯の如き火熾然として息まず、而も吾は已に三界の火宅を離れて寂然として閑居し林野に安處せり、夫今此の三界は皆是我有なり、其中の衆生は悉く是吾子なり、しかも此處は諸の患難多し、唯我一人のみ能くこれを救護せん、

（妙法蓮華經譬喩品の一節經典和譯の五）

主義

日蓮上人の教義一斑（承前）

本多日生師講述
侍者日種筆受

第三節　日蓮上人の國家觀

近時日蓮門下の緇素が上人の國家主義を鼓吹し、日本的宗教として我宗の特長を誇るもの多しと雖ども、其言語の内容に意義あらしめず、其說明の理義に力を注がずして、只徒らに喋々すると餘りに牽强附會に過ぎ、却て世の嗤笑を招くものあり、豈に誡めざるべけんや、抑日蓮上人の本領は「普遍性の宗教」を建設せられたるものにて、世界何れの國をも教化すべく適應せる宗教なり、若し是れを以て單に國民的宗教なりとせば、只一國に限り他國には行はるべからず、上人は一天四海皆歸妙法と云ひ、一閻浮提一同に南無妙法蓮華經と唱ふべしと勸め、全世界の上に廣布宣傳せしめんとせらる、是れ大慈大悲の立脚地よりして只々一國民にのみ私しせられざるの義なり、故に曰「一切衆生の一切の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人が苦と」斯く上人の宗教が普遍性なるの意義は著書到る所に明白なり

次に己人的思想たる成佛の主義即ち解脫の意義は如何に說明せらるゝかを述べんに、成佛とは元來己人の上に就て云ふとなるも、上人の見解は尙ほ普遍性を離れず、或る塲合より云へば、一人の成佛は法界よりも大なりとの意義に於て己人の成佛を認めらるれども、普遍性と己人主義と共に偏廢せず、且つ國家觀をも合せて能く調和せられたり、詳言せば

○普遍性の宗教にして能く國家思想を調和し發揮せり

○己人の成佛を重ずると同時に國家思想を奬勵せり

世人は多く普遍性と國家觀との調和を認めずして之れを分離せんとす、加藤弘之博士が宗教と國家觀とは調和せずと云ふが如きは、其の說未だ聞熟せざるに因るのみ、吾人々類の思想は頗る奇なるものあり、幵は一面普遍性を有しながら國家をも愛するなり、是れ或は思想の衝突なるが如く見ゆれども實際兩者の間能く調和融合せらる、幵は平等慈悲の中に因緣說を認め來り、日本人と日本國とは因緣の關係を有す、甲人と乙人とは其親を異にするも、其の親子の因緣干係は同一なり、因緣同一なる所は普遍性なり、其親を異にする所は恰も國家に於ける干係に同じ、佛陀が四恩を說かれたる中に衆生恩は普遍性のものなり、而して衆生恩の内より區別して父母恩を說かれたり、此父母恩は恰も國家觀に於ける干係に同じ一切の物は彼此愛憎なけれども、因緣の親疎によりて干係を異にし來るなり、上人は錄内二十六、一昨日書に「方今世悉

歸ニ關東一人皆貴ニ土風一就中日蓮得ニ生於此土一豈不レ思ニ吾國一哉」とて、上人は勤王の思想强かりし爲め、其の當時世人は鎌倉の土風に化し、皇室の威日々衰へたるを慨き、日蓮此日本に生れ來れり、人生には因緣の親疎こそ異なれ、凡て因緣干係を捨てゝは何物もなし、今ま日蓮と日本とは出誕の因緣干係を結べり、此因緣輕からず、されば日蓮何ぞ生國を思はざらんやと、又撰時抄に同意義の文あり「但國をたすけんがため、生國の恩を報せんと申せしを」云々、這は非常に卓拔なる議論なり、只々日本と云へる國さへ成立すれば可なり、他國は如何になるとも關せずとにはあらずして、此國土に生れたるが故に此國の爲めに盡すとの意なり、斯の如き意義は頗る發達したる國家思想にして、普遍性と國家思想とを調和せる完全なる主義なりと謂はざるべからず

次に己人の成佛を重ずる塲合と國家との關係に付て上人の遺訓を示さん、今若し自己の信仰を持續せんとするに方り、國家は權力を以て之れを禁ずる塲合は、自己の信仰を捨つべきか、將た成佛の爲めには國をも家をも捨つべきか、若し國家を捨つべしと云はゞニコライ教の如く露探の如きものとなり終らん、斯かる塲合には如何にして其衝突を會通するか、上人は此塲合に於て尤も適當なる解釋を下し給へり、开は

身伏說

にて、吾人精神の自由は苟も捨つべきにはあらず、所謂三軍の師は亡ぼすべく匹夫の志は奪ふべからざるなり、されば信仰は捨つべきにあらず、而も身は伏せざるを得ずと云ふにあり、其の實例は上人の檀越四條金吾頼基に於て見るを得べし、彼れ頼基は忠臣なりき、其の主君江馬殿に於て殿が大事の戰を聞付けたるとき、伊豆より箱根を越えて三時の内に駈付け決死隊の八人中に加はりぬ、又彼れは法華經の行者なり、曾て日蓮上人が龍の口にて頸切られんとせしとき、其塲を去らず兄弟四人割腹して靈山へ御供せんと覺悟を極めたりき、彼れは君の爲めにも法の爲めにも身命を惜まざりき、彼れの主君江馬殿は念佛者なり、信仰の上に於て彼れと主君とは遂に衝突を來しき、時に上人は彼れに代りて其主君に上るべき諫狀を裁せらる、錄内二十九頼基陳狀是れなり、此の狀は身伏說を明かにせり、先づ正義を以て主君を諫爭し、聞かれずんば身伏す、狀の本文を擧ぐれば

又下狀云付ニ是非一主君の存知には隨んこう佛神の御心に叶ひ、又世間の禮義を知れる手本なれと云云 此事最第一の大事にて候間、私の言は恐にて候、本文を可レ引候、孝經云子不レ可ニ以不レ爭ニ於父一臣不レ可ニ以不レ爭ニ於君一鄭玄云君父有ニ不義一臣子不レ諫則亡國破家道也新序云主暴不レ諫非ニ忠臣一恐レ死不レ言非ニ勇士一云云傳教大師云凡當ニ不道一則子不レ可ニ以不レ爭ニ于父一臣不レ可ニ以不レ爭ニ於君一故當ニ不道一則爭之從ニ父之令一又安得レ爲レ孝乎當レ知君臣父子師弟亦同故當ニ不道一則弟不レ可ニ以不レ于師一云云然に頼基をば傍輩の人こそ無禮也と、思はれ候らめど、世間の事に置候

ては是非父母主君の御命に隨ひまいらせ候べし、又其に取候ては重恩の主の邪法の者に誑かされて惡道に墮させ給はん事こそく歎計也

「世間の事に置候ては是非父母主君の御命に隨ひまいらせ候べし」との教訓は、己人の成佛と國家の觀念とを能く區別せられたるにあらずや、明かに認識を經たる感念は威力を以てすとも、之れを動かし之れを奪ふとを得ざるなり、彼の正成が建策用ゐられずして遂に湊川に戰死せしを見よ、彼れが身は君命に從ひたりしも、彼れが確信は毫も捨てたるにはあらず、或は云はん、心從はずして只々身のみ伏するは、眞の正義にあらず、眞の忠義にあらずと、正成の事蹟に就て彼れが皇城を明渡して後、一舉尊氏を追討せんとの戰略は、死に至るも心を去らざりしことを熟考せば、斯くの如き疑難は自から消滅せん、要するに吾人の思想は奪ふべからず、正義は決して滅ぼすべからざるなり、されば宗教の自由と政權の身伏との兩面を觀たる主義は尤も完全なりと謂ふを得ん

是れより進んで上人の潑喇たる眞面目を紹介せん、上人が特長は如何なる事に於て最も勝れたるかと云ふに「國家の眞目的を明かに、日本帝國の唯一の天職を示されたる」にあり、國家の眞目的は上人によりて始めて判明したり、日本國の唯一の天職は上人によりて始めて發揮せられたり、上人の外、他に我國の眞價を認めたるものなし、世人の多くは忠孝の思想、他國と對峙したる上の感念を以て見るが故に差別的なり

杓的なり又或る意義に於ける對内的なり、日本の眞目的は世界の文明を平和の間に求むるにあり、平和の間に智識を求むるにあり、東洋の平和を維持するにあり、之れ平等的なり絶對的なり又或る意義に於ける對外的なり、斯くの如く日本の目的は偉大なり、近時慣用する「人道正義」と云へる語は、只々東洋にのみ限るにあらず、社會全般に亘り尤も平かにして廣き對外的の意義を有す、之れを上人の說に約せば立正安國の主義に當るなり、而して此の正義の解釋は上人に在ては頗る進步せり

對内的――國内の平和

對外的――東洋の平和
　　世界の平和……實土の影現
　　人道正義

立正安國――人道正義(1)
　　出世間大善(2)

右の内(1)と(2)とを區別するは、權教の說にして、眞宗の如き二諦相資と稱し、俗諦(世間)と眞諦(出世間)とを區別するなり、法華經は一實諦として眞俗二諦に分たず、此二諦は一に歸す、故に人道正義をも一の絶對觀に歸せしむ、即ち人生の上に道德を實行することは菩薩の道なりとす、一の大なる善に一致したる塲合は、大小を絶し、時間、空間、分量を絶す、されば最小なる道德も大善に一致するなり、例へば戰役に從事するものは、根本に於て苟も軍人たる以上は炊事塲に働く

と敵の陣頭に奮鬪するとは、其任務に於て難易の別あるが故に、皮相上彼此優劣ありと認むるも、之れを一の大なる忠君愛國の精神の貫ける所より見るときは、其の任務の輕重難易大小を絶して等しく皆唯一の大なる國家的大善を實行しつゝあるものと云ふべし、勅語に所謂「億兆心を一にして世々厥美を濟せる」とは、實に此意なり、法華經の意亦之れに外ならず、下は周梨槃特の如き自己の名をだに記せざる愚人も、上は補處の菩薩たる彌勒も、貴賤上下、持戒、毀戒、威儀具足せると具足せざると、正見と邪見と、利根と鈍根と、等しく大善に一致しぬれば、これ等貴賤等の區別を絶するなり、されば上人が所謂正法の興隆と云ふも只題目を弘むと云ふのみにあらず、固より題目は絶對の信念を表白する形式として醇乎たるものなりと雖ども、只夫れのみに止まらずして吾人人生を圓滿幸福ならしむべく、人道正義以上に出世の大善に融合したる思想を以て、人世を救濟する力を有し、日本を中心として世界に光明を發揮せんとする一大德敎を確立するにあり、是れ敢て他邦を壓伏せんとするにはあらざるなり、吾が日本は世界萬邦に勝れて特に不思議の因緣を有し、世界の人類を救濟すべき一大德敎起りて世界萬邦を風化せん、是れ日本國の天職なりと、斯く上人は非常に日本の國力を廣大に解釋せられたり、蓋し這は多少神秘的意味なきにあらず一の宗敎觀の如く見ゆれども、斯の内に慥に一個の眞理を含めり、开は最も大なる敎が此國に大成せらるゝ所以に付ては、上人は國精（國粹又は國性）の上より立論せられたり、例せば尾張大根は特に尾張に於てのみ適良に發育するが如く、宗敎も亦風土國精の上に一種の因緣ありて發達するなり、小乘主義の如き主觀的の國あり、生々主義活動主義の起るべき國あり、吾が日本は萬世一系の國体にして古來國を辱かしめられたることなく、日清戰爭の結果、遂に尊き地位を占むるに至れり、されば我國は發展主義、活動主義、生々主義をもて立てるなり、即ち是れ大乘主義に適する人種なり、彼の悲觀的の念佛、素性不明の大日、壓迫的に死守する戒律の如き、これ等の思想は全然日本人には適合せざるなり、日本人の道德は積極的なりと、日蓮上人は說かれたり、上人が唱道せられたる念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊てふ四大格言は、其の意義を領納する時吾等日本國民が双手を擧げて歡迎すべき主張たるを認めらるゝなり、开は法華の敎理と日本の國精と一致せるが故なり、歷史を閲するに法華經と日本國とは一致せるとを證明す、法華翻經記に依れば、須梨耶蘇摩三藏が羅什に法華經を授與して云く、此經東北に緣あり、汝愼て傳弘せよと、先哲解すらく東北とは日本國なりと、此說正しく上人の理想に適中したり、上人は立宗の初めより太陽を理想とし、東土日本より一大德敎興りて西土を照し西土に傳弘すべきとを信ぜられたり錄内二十五太田抄には、法華經が日本より西土に傳播すべき因緣を委細に引證し「予拜二見此記文一兩眼如レ瀧一身徧レ悅」と示さる、這は上人が絶對の大法

を思ふ立正の精神と、生國日本を思ふ安國の精神と一致し、國精と正法と契合し、自己の理想が將來實現して世界の人類を救濟する程の大敎此國に興り光輝を世界に耀かさんとを思ふて心身感動喜悅限なきとを述べられたるなり、又本尊抄には「一閻浮提第一本尊可レ立二此國一」とて大に悅ばる、开は本門の本尊此國に光顯せる以上は、他の總ての敎は星光の如く此大本尊の日光に映奪せらるゝを以てなり、上人の名は日を理想とす、かくて上人の理想の中には國家と宗敎とは秩然整然として調和せられたり、斯くの如く上人は國家の眞面目と日本の天職とを闡明せられたり、是れ餘人不所見の妙義にてあるなり

第四節　絶對的信仰と國家的思想

前節に述べたるが如く宗敎の信念と國家的思想とは、上人に於て些の衝突なく融合調和せられたり、而かも皮相の考を以て上人が國家を思はれたる議論を見れば、上人の眼中には只國家のみありて宗敎は全く無きが如く見ゆべく、之れに反して宗敎の絶對の信念を表白せらるゝ場合に「僅の小島の主等がれどさんに恐れては」等と論せられたるを見ては、全く國家の主權を無視せられたるかと驚かん、されど「小島の主等」と云へる如き意義は、却て大に唱道せざるべからず、何となれば上宮太子は已に憲法の中に日本の神すら尙ほ佛陀を歸敬すべきとを訓へられたるにあらずや、彼の聖武帝が「朕は三寶の奴」なりと稱せられたるを怪み、國學者は往々之れを横議す、這は畢竟三寶の意義を熟知せざるが爲めのみ、凡そ三寶には種々の區別あり、住持の三寶と云へば、今日現存せる泥龕塑像の佛、黃卷赤軸の法、剃髮染衣の僧を指し、常住三寶又は一体三寶と云へば、眞實の佛敎の道を謂ふ、斯の道を中心として天子も學者も心を正し國を治むべし、されば帝の勅語は、即ち「朕は道に從ひ、道を守り、道を傳ふ」と云ふの意義なり、約言せば「大なる王道に從ふ」の意なり、是れ豈に嘉言ならずや、斯く解し來れば何の怪む所か之れあらん要するに絶對の信念は、如何に政權を以てすとも到底抑壓し得らるべきものにあらず、學問上眞理を發見する場合も亦同じ、政權は宗敎に立入るべきにあらず、若し立入らんか、是れ所謂野蠻なり、今や我國已に憲法に政敎の關係を明定せられたり、而して絶對の力より見れば政治上の權能は、實に僅かなる範圍に屬す、されば上人は星下抄に

日蓮は幼若なれども法華經を弘むれば釋迦佛の御使ゞかし僅の天照太神正八幡なんど申は此國には重けれども、梵釋日月四天に對すれば小神ゞかし、乃至敎主釋尊の御使なれば天照太神正八幡も頭をかたぶけ手を合て地に伏し給ふべき事也云々

若し淺薄なる思想の輩をして此抄を讀ましめば、必ずや上人を目して傲慢無禮なりとせん、斯かる輩は固より宗敎の思考

なく、絶對の觀念なし、焉ぞ此抄の意義を解するとを得んや

夫れ天照八幡は我國第一の神なり、而かも絶對上の關係より云へば、只之れ本佛の示現たるに過ぎず

本佛／法華經／如來使
／示　現／天　神（天上界）

圖の如く本佛示現して天の神となる、天照八幡等之れなり、天神は即ち天上界に屬す、天上界の主神は梵天帝釋なり、然れば天照等は梵釋よりも小なり、隨て其の任務僅に日本を守護するに過ぎず、而して上人の任務は如何、上人は實に如來の使なり、本佛の使命を帶びたる大責任者なり、內には日本の人類を救ひ、外末法萬年の永き時間に於て世界を救濟すべき任務を有す、之れを天照等に比せば勝れ且つ大なる任務と謂ふべし、是れ即ち宗敎の基礎の上に論ずる談道なり、されば上人の心內より云へば、決して天照入幡を侮蔑したるにはあらずして、偏へに絶大なる自己の責任を重せられたるなるのみ、さればこう前の文の次に曰く

此國の亡ん事疑なかるべけれども、且く禁めをなして國を助給へと、日蓮がひかふればこそ今までは安穩にありつれ云々

當時北條政府が種々上人に迫害を加へ、上人の建策を納れず此國滅亡に頻すれども、獨り上人は毅然として卓立し、日蓮は日本國の魂也」（抄）（足下）「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」（開目抄）と絶叫せらる、蓋し上人の意は此の日本は俗政府の國家にはあらず、一大德敎の興立すべき大日本なり、斯の國家の眞目的を解し得たるもの唯日蓮一人のみ、さてこそ日蓮によりて斯の大日本の靈光を世界に輝かすべきたれ、之れを是れ解せずして、擅に日蓮を殺害せんとす、是れ豈に日本の柱を倒すものにあらずして何ぞやと、斯の大見地に到らざる輩妄りに上人を誹議せんとす、何ゲ省察せざるの甚だしきや、彼輩寧ろ愧死して可なり

上人の著書、安國論、撰時抄、錄內廿六一昨日書、錄內廿南條抄、同阿佛房抄等を見れば、直接に國家の上に付て論せられ、日蓮此國を思ふが故に三諫を敢てせり、如何にもして此國を無事安泰ならしめんと欲す、每に國家の爲めに慨嘆して止まずとの意明白なり、又十一通書には

爲レ君爲レ國爲レ神爲レ佛爲二一切衆生一

と云ひ、一昨日書には

安レ世安レ國爲レ忠爲レ孝矣是偏爲レ身不レ述レ之爲レ君爲レ佛爲レ神爲二一切衆生一所レ令二言上一也

とあり、されば上人は神を侮蔑せられざるのみならず、日本の神の眞目的を思はるゝの意自から明かならん、要するに正法を興立するとは一面道德的の意味を有するも、今日世人が云ふ如き偏狹なる道德にはあらず

完全なる佛道は人道を履んで說明すべきなり

完全なる人道は佛道を履んで說明すべきなり

斯くの如く對絶二善を接合したるもの即ち上人の立正安國論なり、所謂「正法とは對絶不二の德敎」なり、斯の正法は世間の敎となり、又未來の敎となる、吾人は宜しく此の絶對不二の德敎を遵奉して現世には完全なる人となり、未來には成佛の大果を獲得すべきなり、豈に喜ばざるべけんや、勵まざるべけんや

日蓮上人の宗義及系統

本號より掲載する本論文は本多日生師が池の端妙顯寺に每月開かる、先更會に於て講述せられたるものを筆記せしもの也

本多日生師講述
古定賢正筆受

序論

予は日蓮上人の研究者なり、而も予は上人の研究に就ては特に宗敎的研究に重きを置くもの也、今日此先更會に於て予の講述せんと欲する處は、即ち日蓮上人の宗義及其系統なり、玆に附言すべきは予は今病中なれども、門外の諸君が吾日蓮上人を研究せんと思ひ立たれたる熱心を特に喜び、病を冒して出席せし事是なり

先づ序論の第一にいふべきは宗敎研究の態度是也、近時一般に持囃さるゝは歷史的研究なり、比較的研究なり、心理學的研究なり、言語學的研究なり、是等の研究法とて不可なるにあらず、時代の趨勢に順應したる誠に恰好の研究法なり、然れども宗敎の研究といふことは其目的か那邊にあるかといふに即ち信仰を得ること是なり、信仰を得たしと思ふの念はやがて宗敎を研究せむと發意せしむるなり、果して然らばかゝる言語學的研究心理學的研究又は比較的研究歷史的研究に依つて宗敎の信仰は得らるべきか、否斷じてかくの如き研究に依ては信仰は得られと、宗敎の信仰を得んには即ち宗敎的研究法を開かざる可らず、是信仰を得んとするものゝ大に注意すべきこと也、歷史的比較的等の研究法は即ち部分的研究にして宗敎的研究は總合的研究なり、科學の上に哲學ありて總合的研究を爲すが如く、宗敎に於ても比較的研究歷史的研究等の上に宗敎的研究ありて總合的研究の位置に立たざる可らず、現代の學者か此總合的研究を捨て顧みざるは大なる誤りといはざる可らず、

然しながら宗敎心の發動に就て詳細に觀察すれば、甲は推理の思想より宗敎心の發動を來し、また乙は善行に感じ冥福を祈る心より宗敎心の發動と來すものあり、其他此宗敎心發動の諸方面を觀察すれば、其數太た多しと雖も其宗敎心は發動の初期に屬し、いまだ完全なる宗敎心を以て許すべからず、即ち研究の道程にある中間的のもの也、最後の宗敎心は信仰

に入らざる可らず、此信仰に入れる場合の宗教心は雜然たる思想の混合にあらずして即ち一に歸したる宗教の第一義諦の信仰也、渾然一に歸したる場合の信仰は、其處に道德と名くべき分子もなく其處に美觀と名くべき分子もなく、眞に難思の信仰也、强て是を名けて平和の信仰、讃美の信仰、滿足の信仰、歡喜の信仰といふと雖も、其實際の意識狀態はかく分類していはるべきものにあらず、即ち若し一言を以て此間の消息をいへば難思の信仰なり、而して歷史的研究、及び比較的研究の如きは即ち信仰培養の前提なり、信仰は其前提を味ふて滿足すべきものにあらず、日蓮上人の宗義は其勸信門の上に於て道理の上より信仰を勸め、亦は道德の上より信仰を勸め、亦は利益の上より信仰を勸めらるゝと雖も、上人は決して利益、道德、道理そのものに滿足せよとは敎へ給はず、日蓮上人の理想せらるゝ信仰は統一的の信仰なり、故に道理より此統一的信仰に入らしめ、亦道德より此統一的信仰に入らしめ、亦利益より此統一的信仰に入らしめんとし給ひたるなり、即ち上人に在つては道理、道德、利益の如きは信仰を培養する前提なりしなり、上人が此統一的信仰の爲に如何に苦心せられたるかといふに、そはむしろ吾人の意想外なり、上人は其宗義上の一大根據たる本尊に於て、全く統一的組織を完成せられたり、第一は佛敎實相論に於て能く最後に究竟したる實相論を取り、第二に佛敎佛陀論に於ても亦能く最後に究竟したる佛陀論を取り、而して更に實相論佛陀論の合一したる統一的の本尊を光顯し、此に向ふ信仰をして亦能く統一的信仰ならしめ給へり、本尊既に統一的なり、信仰豈に統一的ならざらむや、吾人は此統一的信仰に入るを以て始めて日蓮上人の宗義に入りたるものとなさざる可らず

支那の天台大師も亦宗敎心發動の諸方面を論じ給へり、即ち止觀の一に十個の發菩提心論あり、第一は種々の理を推して菩提心を起す、此は推理的宗敎心なり、第二は佛の種々の相を見て菩提心を起す、これは佛陀觀に入りて宗敎心を起すなり、美觀的發心ともいふべきか、第三は種々の神通を見て菩提心を起す、是はやゝ神秘的に傾き奇蹟等を見て信を起すなり、第四には種々の法を聞いて菩提心を發す、是は福音的宗敎即ち說敎演說等を聞いて菩提心を起すなり、是口輪化なり聞敎入信は人類の通軌なり、第五は種々の士に遊んで菩提心を發す、第六は種々の師を見て菩提心を起す、是は人の種々の働作を見て發す菩提心にして宗敎家の人格を見て發すか如きは其適例ならんか、第七には種々の善を見て菩提心を發す第八には種々の滅を見て菩提心を發す、是は萬物流轉の相を見て菩提心を起すなり、第九には種々の罪を見て起す、第十には他の衆生の苦を受くるを見て菩提心を起す、是は他の人の苦痛を見て而して菩提心を發し他を救はんとするなり、かく天台大師は十個の發菩提心の動機を辨じたるも、うは唯宗

敎心發動の動機を論じたるまでにして、いまだ此思想を一轉進せしめて完全なる宗敎心となさず、吾日蓮上人の如きは、其遺文全部には悉く宗敎心發動の諸方面を擧げ給ひたりと雖も、うは其歸結を告げ、最後に信仰の主惱に入らしむることに努められたり、上人は何れの方面にある宗敎心にても此を捕へ、此に平等、慈悲の影を忍ばせて且く信仰と名け、而して漸次此幼稚にして中間的なる信仰意識を高き最後の統一的信仰に入らしめ給へり、錄內三十八の立正觀抄に本地難思の境智の妙法は迹佛等の思慮に及ばず、如何に況んや菩薩凡夫をやと、此語は實に絕待的信仰をいひ顯し給ひたるもの也即ち境は實相觀にして智は佛陀觀なり、難思の境智は眞理の頂きなり、眞理と佛陀とか一致せる當位也、人間の思慮の到底及ばざる底のもの也、是統一的大信仰たる所以也、日蓮宗近世の學者深草の元政は、曾て始めに止觀を學び、後ち日蓮上人の宗義を學ぶ、後曰く、智惠を高く見て信仰を低く見るは非なり、信得すべく、識得すべからず、立正觀抄を見ては涙止まらずといひたりき、是眞實の告白なり、多年觀念門に頭を沒したる彼としてさもあるべき告白なり、唯涙といまらずといへるが如きは、如何に枯淡乾燥の理談の中より去つて情味こまやかき信仰の門に入りし嬉しさを見るべからずや、涙の出づる信仰は識得より來らず、信得より來るなり、難思の信仰を立て給ひたる日蓮上人の卓見は佛敎發展史上に正に特筆すべき事故ならずや、彼の區々として分科的研究に從事しつゝあるものは識得派に墮落せるものなり、此に反して信得派は宗敎の本體を把持せんとしつゝあるものなれば、其妙味亦意想の外にあり、古來學者が一生の心血を注ひで佛敎の研究に突進せるもの、此妙味を捕へんとてなり、宗敎の妙味は信仰なり、日蓮上人の宗義の精要は此宗敎の妙味たる信仰に於て一大發展を爲して統一的形体を備へたり、是大いに注意すべきことなり

第二にいふべきは日蓮上人の宗義の研究に就て他の誤想を打破し置く事なり、彼の誤想を抱けるもの、多くは日蓮には獨特の敎義なし、畢竟天台の燒直しにすぎずといへり、曾て華嚴の鳳潭も此事を盛んに論じたり、是太だ吾日蓮上人の宗義に通せざるの致す處にして、亦如何ともする能はざる愚侶の輩なれども、さりとは自分の識見の不確實なるにも拘はらず斯の如き言葉を公然と呈露するは太しき僭越といはざる可らず

吾日蓮上人の敎義は佛敎上に於て特殊の發展を爲し、其實相論に於ても、亦佛陀論に於ても、行門論に於ても、實に特殊の大發展を爲せり、而るを世の近眼者流が宗義的系統か天台の敎學より來り居るを思ふて天台以外何物もなしといふて排斥するはあはれむべし、此等は到底佛敎上公平の考が一生浮び來らざる徒也、偶上人を知るものは其人格的方面のみ

にして人格已上に何物の智識もなし、そは人格の研究も必要なり、併しながら日蓮上人の偉大なる處は其由て來る處法華經にあり、法華經は上人をして偉大强烈の人格ならしめたり然り法華經は上人の背景なり、而うしてこれと同時に宗義の神髓をつゝみたる處なり、此故に日蓮上人を知らんと欲せば是非とも法華經及び上人の宗義を知らざれば、其人格も其信念も到底意識せられざるなり

日蓮上人の宗義を研究するには、古來三祕五綱とて舊式の研究法あれども、今は是を採らずして統一的研究の方法に依らんとす、統一的研究の如きとて今更起りたるものにあらず、天台智者大師の如き、亦は三論の嘉祥大師の如きは、皆佛敎の統一的研究者なり、唯其中に於て消極的統一主義と亦積極的統一主義との二あり、積極的統一主義は綱羅的にして、消極的統一主義は歸納的なり、井上博士が實在の契合點を說くも、村上博士が佛敎統一論を說くも、皆消極的の統一主義なり、吾日蓮上人は積極的統一主義なり、吾日蓮上人は積極的統一主義を唱導す、而もりは構成せられたる積極的統一主義なり、予は最初各統一主義に對する上人の批評を紹介し、次に宇宙觀としての實相論を述べ、次に佛陀觀としての本迹論を述べ、以下已心論、人身觀、當体蓮華論を述ぶべし、實相論佛陀論は本尊論の主腦となり、已心論は信仰上の主腦と爲る、次に亦化益論、道義論、國家論、敎相論、折伏論、格言論、敎系論、警句論を已下順次に紹介すべし、

講演

日什聖人置文諷誦抄卷上

講師、齡八十老比丘　阪本　日桓　講演

埴田　聖道　速記

其四

○風聞一乘妙法之花者匂芬々而薰三三土之舊菌本覺顯照之月者光明々而朗寂光之青天實敎之沖徵不可測量者歟

此の本文九句四十七字は吾開祖日什大聖人開迹顯本一部唯本門の法華經体内の本迹を說かせられたる正宗分の法門であります、此の九句四十七字は其の義理が四種に分れて居ります初の「風聞」の二字は謙遜の辭を置て慇懃鄭重に戒愼の意を表し、次に一乘の下三句十七字は法華經本門躰内の迹門の功德を說き、三に本覺の下三句十七字ば法華經本門躰内の本門の功德を說き、四に實敎の下二句十一字は上の一部唯本門の法華經躰内の本迹二經の功德を讚歎結釋遊ばされたる文であります、是が則ち吾開祖日什大聖人が法華經一部讀誦本勝迹

劣の修行門を立てさせられました的證の文であります、下の文の「其要法」と云ふより已下は正行唱題の得道門を立てさせられました的證の文であります、是の如く本迹二經の功德を擧て法華經一部を讀誦しまするのは、開迹顯本一部唯本の法華經絕待妙の修行門であります、此の本門躰内絕待妙は二の本迹に於て又た相待を立て、本門能開の寂光土を以て迹門所開の三土に相對しますれば、本門能開の寂光土は勝れ、迹門所開の三土は劣つて居ります、是れは之れ一部唯本門の法華經躰内の本勝迹劣相待妙の修行門であります、假令迹門を以て劣と呼ぶとしましても、無得道を以て劣とするのではありません、躰外の迹門の如きは從來無得道でありまして、勝劣の名目の關るべきものではありませぬ、開迹顯本の上には、天月の本躰と、水月の迹影と、本有の妙法となりて三世常往有得道の迹でありまして本勝に對する迹劣であります、故に本面迹裏とも申し、本正迹傍とも稱して、法華經一部を讀誦するのは本宗の修行門であります、或る宗派の如き躰外無得道の迹門經を所破の爲めに讀む抔と云ふ妄言誕語とは雲壤の相違であります、若し躰外無得道の迹門經を所破の爲めに日日佛前にて讀み法樂に備ふると云ふのならば、爾前無得道の諸經を所破の爲めに日々佛前にて讀み法樂に備ふるとしても誘法にはならぬと云ふのであるか、又た所破の爲めに讀むならば、一度で讀で無得道なりと破したならば、其れにて事は足るべきである、日々讀んだならば樹想還生の罪過が起ります、釋尊は四十餘年未顯眞實と一回び破し玉ひて後は、再び所破の爲めには說き玉はぬ、れ前方所破の爲めに日々に讀むのは何の故であるか、釋尊は久遠の古佛にして耄碌なされたから日々繰り返し讀んで聞かせると云ふのであるか、果して然であれば實に抱腹絕倒の至りであります、已上は本文の九句四十七字の大意を講述して聞せたのであります、是より一文毎に講釋致します

「風聞」此の二字ば開祖の謙辭でありまして、慇懃鄭重に戒愼の意を表し玉ひし文字であります、此の謙辭に就ては一には經旨に約する謙辭、二には凡聖に約する謙辭、三には年代に約する謙辭、四には國土に約する謙辭、此の四種の謙辭があります、初の經旨に約する謙辭と申しますのは、法華經開迹顯本の妙法は甚深甚遠微妙不可思議にして、佛若し委細に御說法が無ければ、等覺高位の大菩薩迹化の彌勒等も識り得ること能はざる大法でありますれば、況や名字凡夫の我輩共が測り知ること出來得ざるを以ての故に「風聞」と謙遜遊ばされたのであります、二に凡聖に約する謙辭と申しますのは久遠實成の本師釋尊の聖意は識智闇短の凡僧には測り知ること難ければ「風聞」と謙遜なされたのであります、三に年代に約する謙辭と申しますのは、在世と滅後末法とは二千餘回の年月を經過し、靈山親聽の者にあらざれば測り知ること能はざ

るが故に「風聞」と謙遜なされたのであります、四に國土に約する謙辭と申しますのは月氏と日本とは萬里の山海を隔てゝ居り、我輩の如き未だ渡天せざれば月氏の佛法の意味は測り知ること能はざるが故に「風聞」と謙遜遊ばされたのであります、已上此の四種の謙遜に依て「風聞」と御書になつたのであります、

次に「一乘妙法之花者」此の一句七字は開迹顯本一部唯本門の法華經躰内の迹門所被の經法の功德を說きたる文であります、其の理由はどうかと云ひますれば、本門躰内の迹門四一開會の一乘妙法の功德は爾前四十餘年の間に說かれたる華嚴、阿含、方等、般若の四味三敎の各自謂實の三敎の麁人、隔歷未融の三敎の麁理、隨他意方便の三敎の麁敎、各自差別の三敎の麁行なる人理敎行の麁法を永く破廢し開會して、唯一佛乘の妙人となし、唯一佛乘の妙敎となし、唯一佛乘の妙行となしましたのが、一乘妙法の功德迹門の四一開會の法門を一乘妙法と申すのであります、

次に「花」の一字を加へました所以は爾前四十餘年の四味三敎の人理敎行各々差別の冬枯れの麁法でありましては、成佛の果を結ぶ因の花をして開かしめることが出來ませぬ、然るに今の法華經迹門の春季に至り爾前の人理敎行の差別冬枯れの麁法が破廢開會されまして、唯一佛乘の四一の妙法の春の花のであります、

次に「匂芬々而」と此の一句四字は開迹顯本一部唯本の法華經本門躰内の迹門開權顯實四一開會の妙法の春の花の匂の力用が爾前四味三敎の三土の舊蘭に押亘り高大無邊なる功德の薰りがあるに譬へましたる文であります、さて「匂芬々而」とは迹門の開權顯實の四一開會の一乘妙法の春の花の匂が同居、方便、實報の三土に押亘り、其の香りが盛りに匂ふて感應道交の風に靡り三乘、五乘、九界、七方便の眼を悅しめ、心を樂しむるに譬へて匂芬々と御書きになつたのであります

次に「薰三土之舊蘭」文此の一句六字は開迹顯本一部唯本の法華經本門躰内の迹門の能被の人を明したる文であります、此の大意を辨じますれば爾前四十餘年の人理敎行の差別の麁法を受けたる行人、三乘、五乘、九界、七方便の衆生が今の法華經本門躰内の迹門の法席に來至して開權顯實の四一開會の妙法を聞て、感應道交の利益を蒙り、唯一佛乘の人理敎行の四一開會の功德を得たることを明したる文であります

そこで三土と申しますのは同居、方便、實報の三國土のことであります、人間界や天上界の人々は界内の同居の穢土に住居します、又た同居の淨土があります、西方の安養土の如きは同居の淨土であります、三藏敎と、通敎と、別敎の地前の行人の三界見思の煩惱を斷じました者は界外の方便土に住居します、別敎の地上の行人十二品の無明の煩惱を斷じました

者は界外の實報土に住居します、

「舊蘭」是は三土のことであります、此の三土を「舊蘭」と申されました所以は三乘、五乘、九界、七方便の人々は爾前四十餘年の間幾久しく此の三土に住居したる國土でありますれば「舊蘭」と申したのであります、そこで是を「舊國」と云はずして「舊蘭」と云ひましたは、上に「一乘妙法之花」とあります、此の「花」と云ふ字に對しまして「蘭」と云ふ字を用ゐて花蘭と隔句對して三土に譬へたものであるのぢや、「蘭」の字には別に深い意味は無いのであります、

そこで「薰」の字に就きましては「薰陶」と云つて、法華經本門躰内の迹門の開權顯實四一開會の妙法の力用が十界の唯一佛乘の人の各々の身に薰陶たるに譬へたる文字であります、總じて此の一段の法門の大意を辨じますれば、開迹顯本一部唯本の法華經本門躰内の迹門の唯一佛乘の弟子達が、開權顯實の四一開會の妙法の力用の高大なるに依て、無明を斷じ中道を證し初住眞因等の聖位に昇りたるに譬へたる文であります

已上是れ迄が迹門の講義であります、

「本覺顯照之月者」文此の一句七字は開迹顯本一部唯本の法華經本門躰内の本門所被の敎法を明したる文であります、其の「本覺」と申しまする名義は此の十界三千の諸法は本來覺の開けたる佛躰なる者であると云ふのを本覺と申します、さて始覺と申しますのは無始已來の迷を斷じて、今世で始て覺を開いたと云ふのを始覺と申します、此の始覺本覺と申すのに二種あります、一には本佛の釋尊自行内證の始覺本覺と、二には本佛の釋尊化他外用の始覺本覺と此の二種であります初の本佛の釋尊自行内證の始覺本覺と申しますのは、釋尊久遠五百塵點劫の往昔本因妙眞實の修行を遊ばして、本果妙眞實の證を開きたる能證の三身即一の正在報身の釋迦が始覺の佛であります、其の時所證の無始本有無作三身即一の正在報身の釋尊は本覺の佛であります、二に本佛の釋尊化他外用の始覺本覺と申しますのは、本佛の釋尊自行内證の眞實の證を開て成佛してより已來第二番の成道及び世々番々の成道又今日十九出家三十成道の新成妙覺の迹佛を始覺と申します、久遠實成の本佛の釋尊を本覺と申します

次に「顯照」の二字を辨じますれば、「顯」とは顯露、「照」とは照著と申す語でありまして、少も覆藏なく顯露照著に說くことを「顯照」と申すのであります、其の所以は十九出家三十成道の釋尊、始め寂滅道場の華嚴の會座より、鹿苑、方等、般若、及び靈山會の法華經迹門十四品の所說、小乘、權大乘實大乘等の無量恒沙の敎經に於ては、我れは始覺近成の佛なりと說て覆藏て久遠實成の本佛なることを說き玉はらざりしが故に覆藏敎と申すのであります、今の法華經本門壽量品に於て「然善男子、我實成佛已來無量無邊百千億那由佗劫」と說き玉ひて、始て顯露照著に久遠實成の本地の佛なること

を說き顯はし玉ひしが故に「顯照」と申すのであります、そこで「月」と云ふ一字を加へました所以は、本覺顯照の月が始覺近成の闇を破りましたるが故に月と申しましたのであります、此の月には「天月」と「水月」と二種の月がありまして、始め寂滅道場の華嚴の敎主より、終り法華經迹門の敎主の佛は本無今有有名無實の垂迹の權佛でありますから水中の月に譬へ、法華經本門壽量品の敎主久遠實成の本佛は本有今有有名有實無作三身の本佛でありますから天月に譬へたものであります、左樣でありますけれども開迹顯本の上には天月水月本有の妙法でありまして、三世常住の本迹の月でありますれば無窮の利益はあります、うて今の法華經本門壽量品の無作三身本覺の佛を天月に譬へましたことは、本佛の釋尊の內證の大慈大悲の御念慮より竪に三世に高く橫に十方に廣く水中の月の如く垂迹示現して十法界の一切衆生の生死長夜の三土の闇を破て、四土躰一の本時の娑婆即寂光の本國土を照し利益無窮なるに譬へて「本覺顯照の月」と遊ばしたのであります、

「朗二寂光之青天一」文　此の一句六字は久遠實成の釋尊の所居の國土なる本地の娑婆即寂光の本國土を明したる文であります、

さて寂光の二字を辯じますれば、是れは畧して書いた語でありまして、具さに申しますれば常寂光土と書ねばなりません、是れは之れ久遠實成の釋尊事智悲の三身即一の正在應身如來の所居の國土本地の娑婆世界を常寂光土と申すのであります、今其の名義を辨じて聞かせませう、「常」と申しますことは本有常住の事法身如來を「常」と申します、所謂本佛釋尊の色法であります、次に「寂」と申しますことは本佛釋尊の內證より發る大慈大悲の應身如來を「寂」と申します、所謂本佛の釋尊竪に三世に高く橫に十方に廣く垂迹示現して十界の一切衆生を濟度利益遊ばさるを寂と申しますのであります、次に「光」と申しますことは惠光照無量の智報身如來を「光」と申します、所謂本佛釋尊の心法であります、是の如く能居の佛久遠實成の釋尊事智悲の三身即一の正在應身如來の所居の國土を常寂光土と申すのであります、是れは之れ能居の佛を以て所居の國土に名けて常寂光土と申したのであります次に「青天」の二字を辨じますれば、同居、方便、實報の三國土は無明の迷雲に覆はれたる國土でありますれば曇天でありまして青天ではありません、久遠實成の本佛釋尊の所居の國土、本地の娑婆寂光の本國土は一點の無明の迷雲なく晴れ亘りたる國土でありますれば「青天」と申したのであります、次に「朗」と申す字は「あきらか」と讀ます文字でありまして所謂日月の光明の能く諸の闇を除て世界を明かにするが如く常寂光土は無明の迷闇を除き法界を明に照しますが故に朗と申すのであります、

「實敎之冲微不」可二測量一者歟」　此の二句十一字は上の開迹顯本一部唯本の法華經躰內の本迹二門の功德を讚歎し結釋したる文であります

「實敎」の二字は「實」とは眞實「敎」とは所被の敎法であります如來一代の所被の敎法の中に於て開迹顯本の法華經のみが、獨り眞實の敎法でありますれば「實敎」と申したのであります次に「冲微」の二字を辨じますれば、「冲」と申すことは深遠なる貌であります、「微」と申すことは微妙の義でありまして、今の開迹顯本の法華經所說の妙理は甚深にして且つ所說の妙事は甚遠でありますれば、其の功德の微妙不可思議なるを「微」と申すのであります、

次に「不」可二測量一者歟」此の一句六字は吾開祖日什大聖人所弘の經法たる開迹顯本一部唯本本迹二門の妙法の功德を測量せんと欲すれども測量すべからざる旨を述て結釋したる文であります、謂く吾所弘の經法開迹顯本の法華經本門躰內の迹門の開權顯實の妙法の功德は甚深微妙にして、華嚴、方等、般若の未開顯の圓敎の佛の思慮に及ばず、況や其の己下の法惠功德林金剛幢金剛藏等の大菩薩をや、又た開迹顯本の法華經本門の妙法は甚深の上に甚深微妙にして猶迹佛の思慮に及ばず、況や彌勒等の迹化の大士の思慮すべき法でない、是の如く實敎の冲微なる開迹顯本の法華經本門躰內の本迹二門の妙法は予が如き名字の凡僧の測量すべきものにあらざるかと疑の言葉を置き、最初に「風聞」と云ふの二字を置て謙遜して結したる文であります、是れは之れ吾開祖日什大聖人示同凡夫の垂迹の日の御詞でありまして、其の本地は本化の大士でありますれば「風聞」と云ふ謙遜の御言葉にも及ばず、又た「者歟」と云ふ疑の御言葉をも用ゐるに及ばざる依法不依人の立宗經卷相承の大導師自解佛乘玄悟法華意の塔中別付の大正師でありますれば其の內鑑は冷然として御領解あらせられたるものと拜見し奉るべきものであります、

吾等の冬（其一）

横山三藐

珍藏す一切經や御會講
琴月に戀慕流すや小夜時雨
遙村暮れて冬の月洩る古廻
冬の月詩會果てたる樓の上
冬百句得ばやと冬を籠りけり
周易を學んで見たり冬籠
冬籠る據や句の木歌の木
老樂の冬を籠るや歌の擂
冬籠して讀みぬ俳諧問答抄
冬籠る芭蕉が妻の陳腐かな

研究

余が答辨書を讀むと云へる究竟生に告く

清瀬貞雄

播磨に究竟生なる人あり、深厚なる文字の禮を以て余が答辨書に批評を加へらる、元來これは内藤智厚君に代つて彼の貴名志堅君に答辨したのであつた、肝心の御本人は其後何んの御申出もなくッて居つたが、程經てから究竟生と云へる變名か變躰の人かが、側面攻撃とても申のてせうか、横合からの御說を拜見することができる樣になりましたるは、頗る幸榮のことゝ存じます、

段々と竟究生の御高說を拜見しましたが、御說の如き意味合の敎義は、不肯てはありますが小生が十七八歳の頃に既に略ぼ領得して居ッた法門の筋で、別段夫れを承りたくはないのてあります、承りたいと存したことは壽量の實質内容の意義でありました。

ソコデ他にも段々と議論の搆成をすれば出來ませうが、要するに久近本迹觀の異見より外には多くの異點はなからうと思ふ、唯この一根の異見からして他のものを解釋し見て行くから萬枝萬葉までも異ってある樣に互に思ふのであらうと存じます。

惟ふに開顯迹本の妙義を主張點に置くことを得たるは、誠にた互の幸福てもあり、又本化門下の當然のことてもあり、又聖祖に對し奉りて然らざるを得ざる次第てもあると思ふのてところで究竟生は曰く

> 已に二種（久遠壽量 今日壽量）を存せば百千の枝葉は其一根幹に結歸するが如く必ず最初の一本を取て尊崇せざるべからず強ひて同一論を主張せられんか左の疑團か如何解決さるゝや
>
> 一久遠の壽量と今日の壽量と孰れを勝とし孰れを劣と爲すや
>
> 一若法体同一にして勝劣區分すべきに非すと爲は本尊抄の五重三段中の第四重と第五重との壽量の相違點は如何
>
> 一若單に十四品上の壽量と本法三段との相違なりと爲さば實質同一壽量を宗祖は何故に二重に經て本門を建立せしや
>
> 已上余の大に其說を聞かんと渴仰する所なり云云と

加樣にドコ迄も久遠の壽量と、今日の壽量との勝劣を主張されて居ります。

投も久遠と云ふことが尊貴なるは何んが所以でありませうか無論常住に在るのてせう、其常住不死の域を躰得し玉ひたるは誰れてありませう、これ又無論今日の釋尊、歷史的の釋尊、應身たる釋尊、彼の姉崎博士が所謂る現身佛と云へる、始成正覺の今日の釋尊が、常住不死の妙旨を躰達せられたのてありませう、故にこの妙旨を開顯する壽量品以前に於てこそは權佛なり迹佛となりと瞰下して幻影視するもよろしいが、久遠を開顯し了り、常住の本躰に契合し躰達して、始覺本覺一躰不二の妙旨に至りたらば、久始同一躰を成するので、これが開顯たる功能ではありませぬか。

尤も法の上にも躰用あり、人の上にも躰用はありますが、人法を對比して躰用を區分せは、法は躰なり、人は用でありません、其人則ち佛陀の方面に於て、用を取らねばならぬと云ふは、佛陀は化他の用を第一とせられ、慈悲應身の活動に待たねばならぬ、慈應化他なきの佛陀は、衆生の爲めには何人の用にもなりませぬ、この佛陀の化他悲願が壽量開顯の域に到りて、所謂る毎自作是念の大悲願となるので、これを三世常住の益とも云ひ、竪横無限の益とも云ひ、時間空間貫透の益とも云ふのでありませう。

この釋尊の實證躰達の結果其者はと云へば無始事常住の妙旨

で、始本不二等の、各一躰不二の妙義を達觀し、躰得せられたのてあります。

夫れ故に貴生の第一項の疑問に對しては、無論一躰不二てあると申上けて置きませう。

又第二項の疑問と第三項の疑問とは、論旨の關連するところがあるから同時に一所に論しませう、觀心本尊抄の五重三段中の第四重と第五重との相違は、無論其第一重より第四重迄は、一代三段、一經三段、二經六段の階段を經て、普通敎相の上に於て、順序を立て區分し玉ひたるもので、

第五重三段に至つては、一代とか一經とか、本迹二經とかに拘はらずして、絶待的に、宇宙的に、法界的に、文底的に、全觀して壽量の中心なることを御主張になつたので、これを本法の三段とも云ふのてありませう、第四重てあらうが、第五重てあろうが、壽量の實質がドウして變じませう、唯法門の所對の相違のみてあります。

夫れならば聖祖は何故に二重に經て本門を建立せしやとの貴問は、余り幼稚ではありませぬか、この第五重は別意を以て絶待的に示されたるもので、一代に約するの、迹門に約するの、本門に約すると云ふ樣な、敎而下の底き問題ではありませぬ、然るに貴生は第四重も第五重も、同一に本門に二重を建立せし樣に思はるれど、夫れは根本的に誤解されて居ります、能く御一考をなさるの必要はありませう。

この第五重は壽量品を中心として、宇宙法界を判釋したる、所謂る法界の開顯であります。

この超絶せる大開顯の力用ある、壽量の妙旨を採り來つて、唯壽量を主張せらるゝ見地に於ては、誠に敬服の至りてありますが、壽量の實質が、あれだのこれだのと、幾種もある樣に區分せらるゝは不都合ではありますまいか。

本門壽量の妙旨を以て、宇宙的に活動し法界的に應用せば、立派に法界を開顯し達觀し得らるゝのてある、壽量の妙旨豈二致あにんやである、唯一方は、一代、一經、迹門、本門と相對的に順序を追ふて論したるもの、一方は、絶待的別意に依りて、法界を開顯せられたる究竟判てあります、其對する方向が違ふのて、壽量の實質其者は、決して二つあつたり、三つあつたりするものではありませぬ。

又貴論に曰く

> 開迹顯本し始本の不二の妙義を見ると云ふも自ら能開と所開との差別を存するなれば須く始覺を簡て本覺を取り歷史的の應身を排して久遠の本佛を崇敬すべし權實不二なればとて豈權法を取らんや若し斯かるものありとせば是未だ開顯の眞相を盡さゝるの過ならずや云々と。

嗚呼これ何たる言ぞ、抑も能開と所開とを云ふことは、昔迹本對比の場合、又一經中て云へば本門と迹門との分別　直接に云へば壽量品と他品との關係位地を最後に區分したるものである、決して壽量と壽量との對比や、開顯と開顯との對比抔をするものではありませぬ。

又歷史的釋尊を排除せば、久遠の本佛をドウして知得し崇敬することが出來ますか、今日の釋尊が修顯得体の結果は常住不死の妙境を躰得し契合して、始本不二の妙旨を實現せられたのてある、これが壽量開顯の功能てある、今日の壽量だの久遠の壽量だのと、壽量開顯の法に二三種の別を立つるの必要ありませぬ、權迹に對比して以て、久遠壽量の妙義を誇るべきてある、實質同一のものを以て彼これ論するは、畢竟愚論たり病的たる主張に陷る外はあるまいとれもふのてあります。

既に法華經壽量品と云へば、本門を意味し、本門と云へば久遠を意味し、久遠と云へば開顯を意味し、開顯と云へば無始常住を意味するものてある、其法の側に在ては妙法の常住實在を示し、其佛陀の側に在ては常住應化の大益を示し給ひたるもの、是れ壽量品にあらずや、この無始無終常住不變の域に到達せられし以上は、今日の釋尊が即久遠の釋尊と同一躰

で遠つたものでないと云ふことが分るのである、取りも直さず今日の壽量開顯の說に依りて、伽耶始成の釋尊は、久遠以來十方三世に周遍して每自の悲願未た暫くも止息し玉はず、慈化悲益し玉ふ大恩敎主久遠實成の本佛でありしことを知り得らるゝが、これ壽量開顯の難有ところでありませう、決して久遠の釋尊を排するの、今日の釋尊を排するのと同一の壽量中で出來ることではありませぬ、唯法華の開顯を經ざる權迹佛に就いて云ふことであらうと思ひます、夫れを壽量一品中で、久遠の壽量だの、今日の壽量だの、未來の壽量だのと云ふは、非常に特長あり、高潔なる主張の樣に思はるかは知らねど、夫れは余り穿ち過き、云ひ過きたる主張で、恰も過ぎたるは猶及ばざるが如き短所となるではありませぬか、例せば昔しの十五夜の月も、今の十五夜の月も同樣でありませう、十五夜に至る迄の三日月（例せば關白）や、七日月（例せば迹門）などの間は、其照力光影共に相違ありと云ふも不可なしと雖、同一の十五夜に至れば今昔同一の月躰と云はねばなりますまいと思ふので、派別思想を去つて篤くと一つ能くお考を要するところではありますまいか。

加之今日の應身を蔑すれば、三世常恒化他益物の大慈大悲大恩の久遠本佛を崇敬する態度にはなりますまいと思ふのである、然るに今日の開顯に依りて久始一躰の釋尊なることを知らば、無始已來寸時も止息なき恩德に沐浴し居たることを領し得ることが出來る、去すれば益久遠本佛の高遠なる恩德は即ち無始久遠より今日の釋尊に至る迄、猶永却未來際迄も、大慈圓滿の同一なる釋尊なることを領解することが出來るのである、これを開顯說の功用と云ふのである、聖祖の御敎示は決して久遠の壽量、今日の壽量杯と、一壽量中に異種の壽量論を立て玉ふことは、未た寡聞管見の小生、一箇處も見聞したことはありませぬ、併し更に高示明據の御提供を得ば幸慶の至りに存します、但し貴名君以來の屢御引證になりました、彼の治病抄を始め其他の御書は、壽量一品中に於て、今昔を論別せられたるものでは決してありませぬから、亦重ねて御引證になるとも唯識者の抱腹の料になりましては、貴生に對し却て失敬にもなりますから御注意申して置ます。

又世の學見に拘はる樣の仰せですが決してソーではありませぬ、世の學則ち科學哲學等の智識の材料を蒐求し收得するは勿論、併せて世の大勢の起くところをも觀察して、時代思想の如何をば看破し知得して以て我聖祖の大主義をして、社會の如何なる階級にも感化を波及せしめたいと思ふので、切に世學智識を排斥し、己れ却て無識固陋の穴に陷ゆるが如きことのなからむを注意して居るのであります、去れども貴生よ能く虛心淡懷で坊主社會の狀態を見玉へ、其多くは無識にして、無識ならざれは虫喰學、然らざれは重箱的、然らされば固陋頑見てはありませぬか。

今や吾人宗敎家の目前には、滔々として强敵は迫り來り居るを知らざるか、世の大勢の起くところを知らざるか、世の學者は旣成の宗敎を非難し世の博士連亦大に舊佛敎を批評し來れるを知らざるか、世連に進步せる舊檀信徒の厭嫌の情を增し來れるの狀態を看破し得ざるか、唯舊習の老翁老媼若くは無識固陋の者のみを身方とし、感化を盡くしたりと思ふか等の現實の活問題は、少くとも目下宗敎家の頭上に落ち來り、目前に迫りつゝあるにあらずやと思ふのであります、況んや今後の日本は世界的、大陸的に乘り出すのでありませう、これより殖民思想、海事思想の勃興し來るは勿論否現に奮起しつゝある今日、猶未た舊夢を貪り、安眠の狀態とは余り恥べきことではあるまいかとれ互に注意せねばならぬことゝ思ふので、夫れにも係らず重箱の底や角を揚枝でホヂクル樣に、ヤレ昔しの壽量で御座るの、ヤレ今日の壽量で御座るのと、余り呑氣過ぎはすまいかと思ふ程であります。

惟ふに聖祖門下の者は直に聖祖の御書判を仰き奉りて、夫れ

より以下の先師先輩と稱する人々の中興の學見に支配されぬ樣にせねばならぬと存じます、唯智識研學の爲に、百科を研き萬卷を繙くも妨けなしと雖も、其流派々々に於ける中古以來の諸學見に支配されて以て聖祖を律せんとするは大に誤りではありますまいか、お互の任務は本化敎勅皆歸妙法の淵大なる實を擧くべきである、況んや聖祖門下の統一をや、何に況んや一番能く接近せる貴生の門下をや、今や舊友の多くは定めて宗門の樞鍵に當り事を取り、若くは取らんとするの人々多からん、後進の人々も奮勵さるゝとも少からざるべし何んぞ遲々として牛步の如くなるやを異しむのであります、進んで他に先き立て一つ統一を行ふてはありませぬか、宗敎には決して國家問題の如く、小は大に併呑さるゝの、イヤ强者に壓せらるゝなど云ふことはありませぬ、唯聖祖の大義を直承して、スラットしたる明晰なる主張を以て、世の感化に當りさへすればよろしいと存じます、統一事業を以て一の空想の如くに見るものもあるが、決して空想ではありませぬ、世の大勢は年々歲々統一思想の傾向であります、之に反するものは世の順應を知らざるのみならず、第一聖祖の大義を奈何せんと云はねばなりませぬ、之を筆するに當り轉々今昔の感に堪へませぬ、究竟生たる人、余れに匿名を以てせずして實名を告げられよ、これ唯責任と文字の禮を欠きたるを云ふにあらずして、播磨は我父母の國なり、其誰たるやを知り得たれば、直接面會して這般の區々問題の解決のみならず、溫乎たる談話の中、悠々として亦聖祖の大義を上下し、統一の大業を計らんかなと思ふの情切であります。

柱の詩趣

孤峰

雨の降る夜の淋しさや草の庵
草枕夢さまくのこの世哉
やせ法師ありあまるものは旅の路

詞藻

しらふじ

雜司が谷後記

（ある朝のこと）

此處は廣さ〳〵野原である、此間中から兎角曇がち雨がちの空も、今日こうはくもなく晴れ渡りて一點の塵も止めず秋の空の特色を示した、遙か西南の方に三角形に高く見るのは富士山だ、其兩方に淡く蜒々として聳へて居るのは甲駿の山山であらう、又北の方にも薄墨の樣な山々が見へる此は常陸の山々であらふか、

自分はだん〳〵人聲のする方へ進で往た、すると其處には何百人と云ふ程の學校の子供が居た、あア此は運動會であるのだ、さて何處の學校であらふ旗の字が能く讀めない、何にもせよ賑かなものだ奇麗なものだ、子供の大勢遊で居る程無邪氣で面白いものはない、特に目立のは少女が東西南北と驅け廻るので、蝦茶紫色の袴やリボン袖口なゞが秋の日に輝いてさら〳〵するのが、何とも云へぬ程奇麗である、自分はだん〳〵近寄て其處へ立停て見とれて居た、すると三四人の少女が、秋の露にしほたれて夏の盛りの色香も褪たる双の羽を重たげに舞しつゝ飛び來る黃色な蝶を追廻しつゝ自分の方へ

來るのである、うふして蝶はだん〳〵逃げさぐいつゝ自分の立て居る前へ來て、袴のひだへ止て勞れた翅を休めやうとした、少女は得たりと云ふ調子で蝶を包圍して白い手を前後左右から一遍に出て一攫みに仕樣とした、蝶はフイッと上の方へ飛て逃げた、トタンに少女は、各、もたれ合たので一所に前の方へドッところがつた、而かも自分の膝やら脛やら足の上やらへ一時にたをれて來たので、自分も愕然してアッと叫んだ

アッと思はず聲を出したのでフト目が覺めた、すると、どこからとなく滝笛の音が聞へる、ハテ夜が明たかと思ふて頭をもたげると東の雨戸の隙間は白んで居る、あ……なんだ今のは夢なのかつまらない……と思ふて、又た夜具を頭からかぶる、すると又た例の滝笛が神經に泌る樣な響を立て聞へる是は云はずと知れた遙か巢鴨の赤い煉瓦の塀の内から響き渡る滝笛だ、あゝいやな音だ、今迄暖く面白き夢を見て居たものを、頭腦の中心から背骨へかけて腸迄冷水を注ぎ込れる樣な音を聞いたので、急に夢も消へ目も覺めて仕つた、ハテ起ねばならぬか、イヤ寢て居るのも嫌になつた、扨も浮世の響は冷酷なものだ！、無慘なものだ！

自分は起出て戸を開けた、朝日の光りが開たばかりのぼんよりした目に向て、輝ら〳〵とさし込んだので急に目をこすつた、寢衣も着更へて庭へ降りた、そふして朝の空氣を吸ふた、あゝ是てやつと氣が爽快りした、冷酷な響に襲はれた嫌な心持は消て仕つた、朝日は少しづゝ昇て豊島ヶ岡の森に棚引た霧も消へた、

庭の花壇には今を盛りといろ〳〵な秋草が咲て居る、紅、桃色、黄、紫、白、さま〳〵の色を爲て咲て居る、夫が今、夜の世界から起き出て〳〵暖き日の光を望むべく、皆云合した樣に朝日の方を向て清き光を拜謝して居る、其樣が恰度冷き暗き夜の世界の暖さと光明とを與るために出で來りし太陽を出迎て居ると云た樣な態度である、其花の顔に宿して居る露の玉は或は感謝の涙ではあるまいか

うよ〳〵と冷しく清き風が輕く吹て來た、花の顔がゆらゆらと皆動いた、朝日は亦少し昇た

すると無數の露の玉がきら〳〵と輝き始めた、赤く、青く紫に、或者は瑠璃色に、或者は黄金色に、其外は水晶の如く無色透明に、實に見事である、何が奇麗であるとて朝日に輝く花の上の露程奇麗なものはあるまい、清くしてうふして愛らしい、實に朝の花壇は一層の美觀である、昨夕の星が悉く庭一面に天降つたかと思はれる程である、

其内に露の玉は自身の重さで花の顔からすべり落た、其落る時にピカリと一層の光を放つたと思ふ間に光も形も消へたあゝ他愛もないものである草の葉に置く露の命とは能くいつたものだ、若し花の上の露にして二六時中いつても消へずに輝いて居るならば、うふして机の上にでも床の間にでも何處にても飾て置くことが出來るならば、自分は金剛石も水晶の

玉も何も要らぬと思ふ、イヤ全く要らぬ、よし机の上に持運ぶことができなくとも、床の間へ飾ることが出來なくとも、庭や野へ一面に布いたる露の玉が消へないならば、如何に其庭や野は一層の美觀を永久に添へることであらふか、金庭玉野は燦爛として此地球を飾ることであらふに、

されど自然はうふばかりもゆかぬ、夜の中に宿りたる露の玉は、朝日が昇ると共に消へねばならぬ、自然の運命に最後の光明を輝せつゝ散らねばならぬ、若し朝になりても晝になりても消へぬ露が在たならば、夫は朝日か出ても輝かぬかもしれぬ、清き冷しき玉でないかも知れぬ、塵に汚れ泥に塗れて何等の光明をも反射せぬ石瓦の樣であるかも知れぬ、夫を思ふと矢張り露は露て、夜の中に出來て朝の中に消へた方が好いのであらう、

夜の中に人知れず星の住家より天降つて、地上の花の寢床に忍び込み、キッスして居たのであるもの、夫が夜が明た爲めに人に見付たのだ、イヤ太陽に見付たのだ、彼女は羞恥さが一杯で美しき顔に血潮を漲らしたのである、彼女は日頃戀ひ慕ふた地上の花に始て値ふて、今離んとして離れ兼ねて居るのである、朝日に輝くのは彼女の胸の中に燃る情の光である、されど彼女は今は最早消へ去らねばならぬ、其身を隱さねばならぬ、彼女は再び顔の光を輝せつゝひしと花の膝に取り付いた、うふして云ふた、オ、太陽は出で給ひぬ、戀しき君よ妾は最早消へねばならぬ、必ず昨夕の契りを忘れ給ひそ名殘は盡きぬぞ……さらば！、ポタリと落て消へた、花も涙を浮べた、オ、！愛らしき露よ、何とて其方の清き情に反くべき、我も長からぬ命、今日の中にも其方の處へ行かん必ず相待れよと、遂に花の首も前へうなだれた、

あゝ戀は神聖なるべし、されど慕なきものよ、命は長きを欲す、されど今日が日も定め難し、離別は悲しきもの、されど玉も碎くる時節あり、人生は畢竟花と露との如きものであらふ、花の美しき、露の清き、うふして其自然的配合の麗しきも、朝一時の眺めである、朝日の昇らぬ間である、詩人や宗教家が類りに無常を說き運命を謠ふとも、畢竟是故であらふ

されど是も自然であれば仕方がない、花の美しく咲いたのも自然である、露の清く宿りたるも自然である、そふして太陽の光に麗しく輝くのも自然である、風が吹のも自然であれば玉の散るのも自然である、何事も自然の仕事である、あゝ花計りでなく露のみでなく我々も自然の玩弄物である、されば花は如何に脆くとも年々歲々咲くのであらふ、露は如何に慕無くとも朝な〳〵に宿るのであらふ、人は如何に死するとも子々孫々と生れ來るのであらふ、戀は如何に慕なくも青春の男女は必ず相慕ふのであらふ、是も自然がする作爲である彼等は相慕ひ相思ふて相抱擁する、然かも自然の運命は、彼等に離別を命じ死を命ず、古の人は謂けらく「儘ならぬが浮世じや」と、浮世を儘にするのは唯自然のみであらふ、あゝ自然のみであらふ、花よ露よ汝の運命は自然に趣く浮世の態

とあきらめよ……

一陣の冷しき風が颯と吹き來た、庭の草花は悉く首を振た木の枝が一樣にゆら〳〵と動いた爲めに今迄光り輝て居た露の玉は悉く散て了た、同時に向ふの垣根の茶々花の赤いのが二ひら三ひら散た、

フト氣が付て見ると太陽は煌々として三竿に昇た、自分は額を洗ふべく齒磨を手に持ち、楊子を口に喫へたまゝ、こんな下らない空想に耽て居たのであつた、

臺所の方で手の鳴る音がする、朝飯の出來た知らせだ、ふしん君が起き出でた、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此件が雜司ヶ谷字水久保の我等が住む家の庭園に於ける或朝の事であるのだ

（をわり）

吾等の冬（其二）

横山三藐

火を失し賤ぐ家あり冬の夜
凡天下に寒念佛なんぞほうけたる
根深切るは一茶ならずや藥喰
京の弟子吹革祭に歸りけり
灯點々十夜の寺の見ゆる哉
蕪村忌や凡董を語る人は誰
夜興引や狸顔出す藏の月
江渺々蘆鬚の庵の小夜時雨

紹介

慶長十三年淨土日蓮の宗論に就いて（承前）

文學士　辻　善之助

日經の浪流と其末路

さて日經はかの法難後、所々に流浪しましたが、其狀況は、『常樂篇』及び所々の文書の中、彼れの手紙によりて明である『日經一期之橫難』に、「廿一日朝、大勢にて押寄、寺を打破、某押出、……栖所處々の主、使を立て、日經を不可置糺明せう、丹波國へ下り、本門寺と云寺に、隱居す、到爰候得ば、其處の代官聞て追拂ひ、寺々を拂はれ、在々を出さる」とありますこの時木崎宗味といふ信者ありて、常に日經に供し、この後若州小濱へ下つた處、天下の御勘氣を蒙る僧なりと訴ふるものあり、即また退いて、越前加賀越中に赴きました、かく至る所、流浪して一所も安んじて居る所がないこのころの狀を、日經自ら說いて居ることばに「今はありかもなく五日三日づゝかくれしのび候て、身のおきどころもこれなく候あさましき身になりはて候、……日蓮聖人御書に、日蓮は五尺の身をうけて候へ共日本國に身のおきどころなしとありばされ候に、少もちがわず候……（蓮成寺文書三月廿二日の狀）またある消息に「我等今わづらひの身にて、いどころなく、見ぬ國きかぬ國へるろふのありさま、心中たもひやり給候、さて〳〵なさけなきしあわせに候、我はあさましき身となり、行ささしらずに、北國を彷立、遠海波濤へるろうにきわまり、なみだとともに此文をかき」、云々とあります、まことに氣の毒な狀況になつたのである、けれどもかく流浪して居る中には、さゝ篤く之を信ずるものも出來て、禁網とくゆりて、其像を酒舟に載せござ莚を覆ひ隱しれいて禮拜した處が、下人共不禮の事あれば、或はおりはれ、或は悋き事共が有つたので、在家に安置すべからずとて竹原之仙端院といへるへ移して、夜々忍んで參詣したといふ話がある、（常樂篇）この事たるや、恰もかの不受不施の徒が、隱れ忍んで倉の中に題目をとなへたりといふと、其趣を同じうするものである、加賀にいたりし處前田の老臣三輪志摩守長好といへる人、利家利長利常の三代に歷仕したる人なるが、日經の躰を見て、耳鼻なしといへども尋常ならぬ相貌なるを悋み、之に對面して、その說をきゝ大に歸依し、終に一ヶ寺を建て本覺寺と稱した、この後、日經は越中富山に赴き、りこの家老村隼人歸依して正顯寺を建て、後山中に隱遁して、元和六年に年七十を以て寂したといふことである、日經寂所については二說あり、一は加賀本覺寺においてといふので、これは『日經一期之橫難』の奥書、及び『經師年回勸進牒』にあり、また一は越中富山より三四里在の山邊の某村のはなかけ山といふ處といふ、これは『常樂篇』に見えて居る說である、

結

以上を以てこの問題の大概を講じ終つたつもりである、蓋し當時日蓮宗の意氣頗る沈滯し、昔日の氣慨は何れへか消え失せて居たのである、日經のこの擧動は一方よりみて宗内の眼をさましたといふことができると思ふ『常樂篇』にも「天文以來中絶したる、說法興起し玉ふ故、他宗の怨嫉甚重也」とあり、されどこれは政治の當局者からみれば、あまり活動せられては處置にこまるもので、平和を破り秩序を亂す恐がある故に、十分に之をたさへつけ、之によりて他のみせしめに之を懲らしたのである、家康は元來宗派のすべてには極めて公平の態度をとり、一宗のものが他宗を誹毀するなどいふとは社會の秩序を保つ上よりして、之を喜ばず、その最も御氣に入りの源譽でさへ、かつて天台宗をうしりて、家康の機嫌をうこねた事がある、それは『岩淵夜話別集』にある、江戸の淨土寺の和尙が、駿府へ參て話に、佛法は元來釋迦の一法であるのが、末世に至り、八宗十宗とわかれて、敎樣が別々になるやうであるが、元は一法であるからとて、諸宗へ踏迷ふのは諸宗ともに宜しくない、念佛宗では、特に之を嫌ふと云ふた處、家康は成程尤である、然れども我身一身を助かろうと思ふものと、天下國家の爲めをはかるのもとは、事が違ふ天下萬民の中には、八宗も十宗もあるから、天下國家を保つものは、諸宗ともに捨ずして、ひろくみちびかするやうにしたいものだ、といつたといふ話がある、これは有名な話であつて、この淨土宗の僧といふは、蓋し源譽だろうと思はれるのである、これと同じやうな話が、も一つある、りれは慶長十八年九月のことであるが源譽駿府に參て、諸宗中念佛宗が一番よいとて、大原問答を證に引いた處が、家康よろこばずといふ話がある、かくの如く、家康は諸宗公平なる態度をと

つて居た丈、それ丈、他宗を誹毀する事の甚しい日蓮宗に對しては、あまりよき感情はもつて居なかつたらしい、殊に、不受不施の如きは、殆耶蘇教と同樣禁せられるやうな有樣に後になつた位であるから、日經の如く、ひゞく他宗をそしり安寧を妨げるものは嫌はれたに相違ない、この後日蓮宗のものはつひに、時勢に適應するといふよき名目の下に、やはり幕府の意に從うて、うまくその掌中にまろめられたのである身延の日遠の如きその一例である

要するに、この事件は、戰國の混沌時代より、德川太平の秩序恢復の天下に移る過渡時代に起つたので、此後、慶長より元和の始に渡り、だん〳〵に、諸宗の法度を定められた、其前に當り、これから漸く諸宗の取締にかゝろうといふ時であつたのである、其時に當て此事件は、德川幕府が、日蓮宗に對する態度、及、諸宗駕御の有樣、又、日蓮及び淨土宗内の内情の一班をあらはして、稍趣味ある問題であろうと思ふ、

附　言、　大原問答について

この稿終つた後で『淨土宗教典志』を見ました處、かの大原問答僞作說についての一材料となるべき記事を見出しました、即同書卷一の終の方に、大原談義開書鈔一卷と記して、「表題云大原談義、源空上人說纂述、鈔云禪覺法印記」と註し、之を眞僞未決部といふ中へ入れてありますす次に、僞妄濫眞部といふ中に、麒麟聖財立宗論四卷としるして、「僞稱後魏三藏大法師菩提流支造、專立三輪二藏性相二顯等名目、分別一代佛教、文辭卑拙僞妄灼然……案異門徒雖以流支爲傳法祖、無著遮可據、因造斯論以明其系耳、故聖問製淨土略名目、專用斯論、又妄造流支傳……詐騙之態不亦甚乎、鎭徒良忠了慧等尙不用之、他師之云哉」と註してあります、これによると、聖財論は聖問の僞作であるとまてはいはぬが、誰かの僞作である事は明かである、また、大原問答も古くから疑があつたものと見ゐる、この教典志は本願寺の學者、玄智が安永七年に編したものである、

終に、この問題考究について品川妙國寺の本多日生君が、日蓮宗側の材料蒐集に盡力せられた事を厚く謝します、

雜報

○先更會　同會は第二回を十一月十三日池の端妙顯寺に於て開きたるが講師は本多日生上人にして講題は日蓮上人の宗義及其系統にて各異なれる統一主義の批評より漸次日蓮上人の統一意見を紹介せられたり第三回は十一月廿七日第四回は十二月四日矢張池の端妙顯寺に於て開かれ日蓮上人の積極的統一主義に就て講演ありかく數次の會合に來集せる聽者は、帝國大學、早稻田大學、第一高等學校、哲學館大學、顯本法華宗高等宗學院の學生にして遠きは駒場、早稻田、雜司ヶ谷より近きは駒込、小石川、淺草より來會せられしといふ尙第五回は前記會場に於て卅八年一月十五日午前九時より開かるゝといふ

○梶木日種師の赴任　第十四教區和泉國堺市取要山妙滿寺と云ふは今を去ること四百余年の昔永正年中京都總本山妙滿寺

第十七世智覺院日誠上人の開基にして寺號を照光寺と稱し其の當時行本坊とて塔中を有せし小本寺なるが彼の天文法乱の砌總本山妙滿寺が京都より此の寺に避難し以來遂に妙滿寺と稱するに至れる由緒ある寺なるが去る十月中住職森義觀師辭任に付き宗務廳錄事たりし梶木日種師新に住職に任せられ十月二十七日午前十時より晋山式を擧行し式終て前住の送別會を兼ね新任披露の祝宴を全寺書院に催せり今其の概況を報せんに當日來賓として大坂より該教區管事蓮成寺主僧正清瀨貞雄師を始め堂閣寺主古谷養眞師溝口會旭師臨席又全寺檀家總代村上貞藏氏は今春已來用務の爲め京都へ滯寓中の處特に歸堺して寺務引繼に立會當日式辭として先づ全氏立ちて檀家一同に對し新任梶木師は不受不施講門派に於て樞要の地位を占め居られしが昨年夏期播州明石に於て本宗專門講習會開催の折參會聽講の結果本宗の教義に歸依し即ち村上氏を介して上京の上本多日生上人の門に入り傍ら哲學館に通學し專心研修を積み遂に捨邪歸正して本宗に歸入し今回師命に依り當寺に住職するに至りし顚末を披露し且つ當寺は本多上人が初めて住職せられし緣故ある上殊に臨席の古谷溝口二師は共に當寺の前住なるに斯く偶然にも先代三人共此の式に臨み教區管事まで態々臨席せられたる事は世の晋山式中多く其の比を見ざる光榮なれば宜しく新任梶木師に於て悅を以て將來寺務と教導とに努力せられんことを希望すと述べ梶木師はこれに對する答辭並に新任の披露挨拶を述べ清瀨僧正は又宗教心に就て現在の狀態并に教導方法に就て注意條項を懇說せられ一同歡を盡して目出度散會を告げたり因に云ふ同寺檀中には宗義の研究信仰の增進を計る爲め本勝講と稱する講中組織ありて月次輪番に自宅に於て開莚せしが久しく中絕の姿となり居りしを今回梶木師赴任を機としこれを再興し即ち十一月より初會を村上總代の宅に開くことゝなれりといふ

○津山通信　同地に於てさる九月中板野常三郎、今井喬、池村與六郎、林伊平、植月寅吉、玉置圓次郎、河野稻太郎、安藤文太郎、の諸氏發起となり日曜清話會なるものを起し何宗の人たるを問はず宗教及び道德上の事に就て各自意見を交換し以て比較講究の資料に供しなるべく完全なる信仰道義を把持せん事に努め居れるが同會の講師としては原田容廣師山名木信氏を聘し性善性惡論、人格的實在論、萬有的實在論、倫理的實在論、三身論、理想宗教論、靈魂論、我說、有神論無神論、六根六塵の關係、絕待相對の意義、四箇格言の略解我と靈との關係等の諸問題に就て講究なしつゝあり尙同會はさる十一月十二日津山町長久樓に於て宗教演說會を開き左の演說あり

問會の辭　今井喬
人は何故に此世に生れたるか　池村與六郎
宗教研究の根本問題　山名木信
迷信の打破　原田容廣

此日聽衆三百餘名にして頗る盛會なりしよし願はくは同地方の光明たれ

○千葉縣通信　去る十一月廿二日第五教區桂安立寺に於て第六回の祈禱會を開催せり信徒數十名參詣し盛なりし由

○遠州通信　靜岡縣遠州吉美妙立寺に於てさる十月十八日露戰役に於て戰死したる陸軍看護卒野末兵太郎氏の爲に村葬を執行されたり當日式は午後一時の第三番鐘と共に始り日沒に到り了りたるが當日の正導師は妙立寺現董大僧正牧田日禧師にして副導師として西山日諭高橋遵碩の二師中座は妙立寺一老職清水純榮師外五名にして各宗の會葬者には鷲津本興寺住職酒井日明師外十六名外に知事代理として濱名郡長松井良哉氏愛國婦人會を代表して濱名郡軍人後援會々長海軍主計監長谷川貞雄氏新居分署長心得荒井仁平氏吉津村々長袴田孫兵衛氏吉津在鄕軍人總代小林熊吉氏外小學校、同窓會白須賀各宗佛教慈善會等の總代數名にして各自弔文祭詞の朗讀あり

たりと云ふ因にいふ林與十氏の村葬も右同樣の式を以て執行されたるよし

○三河通信　去る十二月三日三河二川妙泉寺に於ては山主猪野貞省師導師と爲り午前十時より皇軍全勝兵士健全の祈願幷に征露軍戰病歿者追吊法會を營み午后二時よりは演說會を開會せらる其演題辨士は左の如し

開會之辭　朝倉一乘
人生之幸福　野中通芝
戰爭が殺人の價値　高橋道頑
時局の感　山橋道頑主

右の演說了りて同六時閉會、當日は聽衆數百名、宗敎冷淡の地としては近來未曾有の盛會なりき、因に當山主は開戰以來連月十五日には戰捷祈願會及び演說會を執行せらるゝ爲め法益多々なり（信徒　倉橋和作投）

○千葉縣通信　去る十二月三日、帆丘町高田長榮寺に於て祈願會を開催す、管事伊藤寅樹師を始めとし、西村會立、島本順祐、世羅學信、伊藤憲洪、田中榮應、若江乾英の諸氏出席あり、西村會立、伊藤憲洪兩氏の簡短なる、說敎演說あり參詣の信徒十名、讀經唱題の聲、盛なりし、

○岡山通信　我篤信會にては去る十一月廿三日午後七時より旭町高木氏宅に於て例會を開催したり其演題と辨士は左の如し

開會の辭　森田林靜
信行の要道　松崎事成
提婆龍女の得道　能仁事一

十一月廿六日には本行寺にて開會の筈なりしが今回は方面を替へ榮町九重館に於て開演する事となりたるが當夜は非常の世評にて開會時刻迄には滿場となれり殊に聽者の過半が學生を以て埋められたるは快心の事なり其演題と辨士は左の如し

開會の辭　森田林靜
人生の一大事　能仁事一
宗敎的人生觀　松崎事成
法華は向上進步の極致　能仁事一

廣告

今般本會々報トシテ『大崎學報』發行會員に頒布ノ餘ヲ汎ク希望者ニ頒タントス就テハ印刷部數ノ都合モアレバ希望者ハ左記廣告末尾ノ規定ニ準シ必ズ來ル三十八年一月五日迄ニ前金添付申込レタシ

十二月六日　東京府在原郡大崎　日蓮宗大學林　同窓會文學部

大崎學報第一號（菊版　明治三十八年　百頁　一月十三日發行）

要目

▲本林全影及講堂內部寫眞二葉　口繪
▲薩摩に興ふる書……本妙臨師遺稿
▲四條抄の一節を講ず……林長
▲木宗敎義一斑（觀文類纂）……小林大僧正　敎頭　木間僧正　法話
▲青年宗敎家の態度如何……小林文學士
▲史學と佛敎……若木文學士　研究
▲神祖哲學と一何そや……柴田敎頭
▲聖祖傳（出世以前の概觀）……鳳閣敎頭
▲智識と信仰……山田敎生　講演
▲宗敎改革論……綱村文學士　雜纂
▲四郎太夫殿……日向上人遺稿　六老
▲顯底抄……日蘭上人遺稿
▲不受不施派史料……曳倉生
▲身延紀行（歌）……日相上人遺稿　想園
▲聖日蓮とソクラテス▲信念修養▲月下の感（聖祖を偲ふ）▲種々御授籌抄を讀む▲先づ聖祖を知れ▲短歌二篇▲鎌倉紀行等歌篇　榮報
▲職員動靜、同人消息等

一、當分無定期毎學期一回發刊ノ豫定
一、一部拾錢（郵稅二錢）郵券代用一割增）前金ニ非レバ發送セス
一、爲替ハ芝區白金郵便局受取人ハ本會々計宛

岡山市上之町
柿屋太物店
店主　久城茂太郎

岡山市上之町（電話貳六〇番）
呉服商　柿屋本店
店主　久城茂太郎

京都市車屋町通姉小路上ル
柿屋本店京都染物部
店主　久城茂太郎

岡山市中之町（電話壹五八番）
柿屋鼈甲店
店主　宇垣卯三郎

岡山市上之町
柿屋蒲團店
店主　久城梅

岡山市上之町（電話貳五五番）
柿屋南店
店主　久城亀吉

岡山市車町通り
柿屋北店
店主　久城清吉

御雛附ぞく
武者人形
東羽子板
小道具人形

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回
全卅七年十二月十五日發行統一第百十七號　十五日）

廣告

歳末に付き會計上整理の都合有之候間誌代滯納の方は至急御拂込成相度希上候也

明治三十七年十二月　東京淺草區南松山町　統一團

改姓廣告

不肖容廣儀今般津山舊藩士山本家を相續致候間此段先輩諸賢に報告致候也

舊姓原田事
作州津山木遂寺住職　山本容廣

明治卅七年十二月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暐學
印刷所　北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所　統一團

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地　統一團